知る

ホタルの存在は自然が残されている証
時間をかけて育むことが大切

地域資源でもあるホタルの保護。そのためには生態やホタルが置かれている現状を知ることが必要です。この地域で長年ホタルを見守ってきた君島さんに話を伺いました。

一生の大半が水中 羽化して10日の命

ホタルは甲虫で、カブトムシなどと同じ仲間です。ホタルの一生は約1年。そのうち約10カ月を幼虫の姿で過ごします。市内に生息する主なホタルは、ゲンジボタルとヘイケボタルの2種類。幼虫は4～5月になると陸に上がって土に潜り、成虫になるために約1カ月ほど土マユというサナギの状態で眠ります。そうして羽化した後、交尾相手を求めて光るのです。

成虫として生きられるのは約1～2週間…本当にあっという間です。成虫は口が退化していて水分しか摂取せず、幼虫期に蓄えた栄養だけで過ごします。

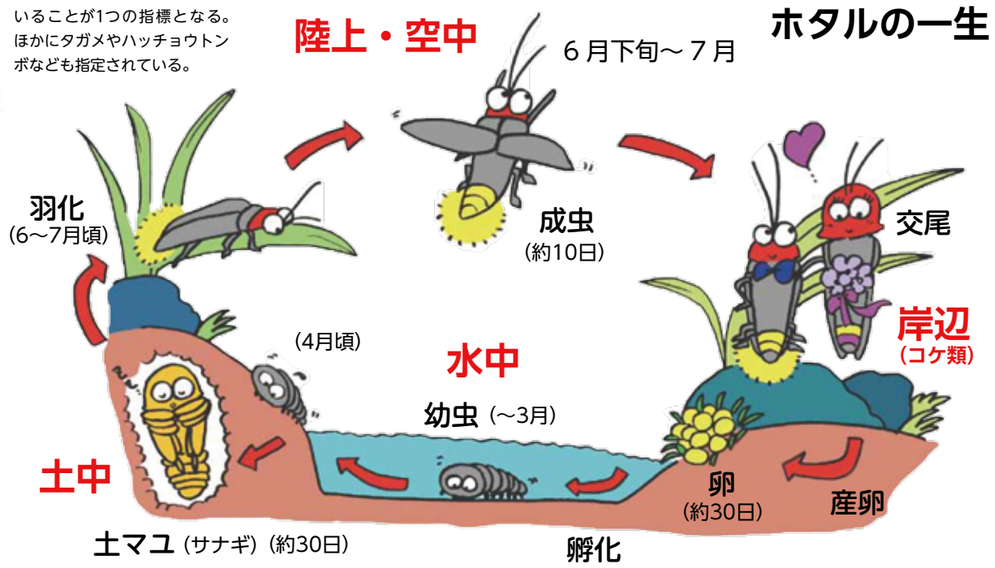
全てが揃ってようやく育つ

ホタルは一生のうちにあらゆる環境を介して育ちます。幼虫が育つ水中、成虫が飛ぶ空中のほか、産卵するコケ類のある岸辺、サナギが眠る土中など、ほぼ全ての環境条件が揃わないといけません。そのいずれかの環境が、汚染や人工物の設置などによって阻害されると、ホタルにとっては一気に過酷な生育環境になってしまいます。

それだけ変化に敏感な昆虫なため、指※標昆虫にも指定され、良好な自然環境を示す基準にもなります。つまり、ホタルが住める環境を残していくことが、豊かな自然を残すことにもつながるのです。

市動植物調査研究会
副会長　君島 章男 氏

※環境調査のために選ばれた10種類の昆虫のこと。良好な自然環境に生息するため、生息していることが1つの指標となる。ほかにタガメやハッチョウトンボなども指定されている。



次第に崩れる共存バランス

ホタルは昔から人と共存してきました。しかし、近年このバランスが崩れつつあります。主な要因として農薬の散布、人工光の増加、エサの減少、水辺の開発などがあげられます。これらはいずれも人間の生活要因によるもの。

人工光の増加は「光害」と呼ばれ、光に敏感なホタルは、人工光が照るところから姿を消してしまいます。また、幼虫の餌であるカワニナなどの巻貝の減少は、水質汚染による影響が大半。人間が配慮することで共存できる余地は大いにあると思います。

復活は時間をかけてゆっくり

ホタルは生息する水系ごとに固有の遺伝子を持ちます。実際に東日本と西日本とで発光間隔が倍以上異なる個体群もいるほど。そのため、ただいたずらにホタルを放すのはよく考えなければなりません。ホタルが減った原因を分析し、今ホタルがいるところをこれからも守っていくことが最も大切だと思います。